

小学校外国語活動の授業改善に関する研究

ー活動の目的を明らかにしたスモールステップの設定を通してー

小学校外国語活動研究チーム

【要旨】

本研究は外国語活動の授業の充実を図るため、活動の目的を明らかにし、児童の実態に即した授業改善を行うための基本的な考え方を提示することをねらいとしている。具体的には、第二言語習得の認知プロセスに基づいたスモールステップを設定し、それを用いて各単位時間の展開及び単元計画を作成した。このことにより、指導者は『英語ノート』の各活動の目的を理解し、目的に沿った発問や指示の工夫が行えた。また、活動の目的を明示することで授業改善の視点が共有でき、授業改善に役立った。

【キーワード】

授業改善 スモールステップ 目的を意識 発問・指示 第二言語習得の認知プロセス
PDSAサイクル

チームメンバー

和歌山県教育センター学びの丘研修員
有田川町立藤並小学校
教 諭 清水 秀基
岩出市立山崎北小学校
教 諭 秦野 敬子

和歌山県教育センター学びの丘
研究開発課長 三角 雅彦
基本研修課
指導主事 赤井 祥子
指導主事 辻岡 直樹
専門研修課
○指導主事 辻内 高政
研究開発課
指導主事 喜多 恭子
○印・・・チーフ

研究協力者

京都外国語大学
特任教授 齋藤 榮二
京都外国語大学
教 授 石川 保茂
帝塚山学院大学
専任講師 近藤 睦美

有田川町教育委員会
岩出市教育委員会
有田川町立藤並小学校
教 諭 楠部 早苗
A L T Johnny Diep
岩出市立山崎北小学校
教 諭 田村 典代
教 諭 草田 耕平
岩出市立中央小学校
教 諭 巽 泰之

【目次】

1	研究の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
	（１）外国語活動導入への経緯	
	（２）教育センター学びの丘指定研究の取組	
	（３）現状と課題	
2	研究のねらいと内容・・・・・・・・・・・・・・・・	4
	（１）第二言語習得の認知プロセスに基づくスモールステップの設定	
	ア 気づきのスモールステップ	
	イ 理解のスモールステップ	
	ウ 内在化のスモールステップ	
	エ 統合のスモールステップ	
	オ 運用のスモールステップ	
	（２）スモールステップを用いた各単位時間の展開と単元計画の作成	
	ア スモールステップ	
	イ 取り扱う語彙や表現	
	ウ 復習としての統合のスモールステップ	
3	研究の実践・・・・・・・・・・・・・・・・	8
	（１）概要	
	ア 検証授業実施状況	
	イ 検証授業の進め方	
	ウ ふりかえりカード	
	（２）各スモールステップの実践例	
	ア 気づきのスモールステップ	
	イ 理解のスモールステップ	
	ウ 内在化のスモールステップ	
	エ 統合のスモールステップ	
	オ 運用のスモールステップ	
	（３）各スモールステップの指導上の留意点	
	（４）スモールステップを用いた学習指導案例	
4	授業を通しての効果検証・・・・・・・・	18
	（１）Plan	
	（２）Do	
	（３）Study	
	（４）Action	
	（５）児童の様子から	
5	課題・・・・・・・・・・・・・・・・	20
6	今後に向けて・・・・・・・・	20

1 研究の背景

(1) 外国語活動導入への経緯

平成 23 年度は小学校外国語活動が全面実施となった歴史的な年度である。小学校における英語の導入については、スキル面を中心に英語力の向上を図ることを重視する考え方と、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り国際理解を深めることを重視する考え方に分かれ、1980 年代中ごろから議論されてきた。こうした状況の中、平成 14 年度からは、「総合的な学習の時間」における国際理解に関する学習の一環として、英語活動が全国的に取り組みまれるようになり、「小学校英語活動実施状況調査」(2007)によれば約 97%の公立小学校で実施されるようになった。しかし、活動の目標や内容に相当なばらつきが生じてきたため、教育の機会均等の確保や中学校との円滑な接続の観点から、平成 20 年 3 月に告示された小学校学習指導要領において、領域としての「外国語活動」の必修化が示され、その後 2 年間の移行期間を経て今年度より全面実施となった。

(2) 教育センター学びの丘指定研究の取組

和歌山県教育センター学びの丘では、平成 20 年度から 3 年間にわたって外国語活動の円滑な導入に向けて研究を行ってきた。「全国都道府県教育長会議の研究報告書」(2008)によれば、一般の小学校教員の 8 割以上が学級担任として単独で指導することに不安を抱えているという調査結果が出た。こういった状況を踏まえて、平成 20 年度は、指導者の不安や負担の軽減を研究の主なねらいとして『英語ノート試作版』に基づくオリジナル ICT 教材(電子黒板用教材)の開発とそれを用いた授業モデルの提示を行った。平成 21 年度は、共通教材として配布された『英語ノート』に基づくオリジナル ICT 教材の開発と、ALT との TT 環境を擬似的に創出する「実写版 ALT 動画」の作成を行った。また、「児童による自己評価・相互評価」「指導者による評価」について、具体的な評価方法の研究を行った。平成 22 年度は、前年度に引き続き、オリジナル ICT 教材の開発と評価方法の研究を行うとともに、外国語活動での経験を中学校の英語の授業に生かす円滑な小中接続の在り方についての研究を行った。(詳しくは、同センターHP ページ内「小学校外国語活動」(※1) 参照)

(3) 現状と課題

これまで全国的にも様々な研究と取組がなされ、外国語活動の全面実施に向けて一定の基盤が整ってきたと言える。現在、第 5 学年及び第 6 学年において、主に『英語ノート』や付属のデジタル教材を用いて、それぞれ年間 35 単位時間の授業が行われている。実際に授業を行う教員から、より具体的な課題が指摘されるようになってきている。日本英語検定協会の「小学校外国語活動に関する現状調査」(2011)(※2)によると、「現在、外国語活動において、貴校で問題や課題であると感じていることはありますか。」の問いに対する回答では、「指導内容・方法」(39.4%)がもっとも多く、次いで「評価内容・方法」(33.2%)、「指導者(担当教員)の質・技術」(32.4%)が続いた。また、平成 23 年 6 月に当センターが県内 4 会場で実施した「小学校外国語活動研修講座」におけるグループ協議においても、下記に示すような指導内容・方法に関する具体的な課題が出された。

- ・授業で英語より日本語が多く、これでいいのか悩むことがある。
- ・すべての子どもが自信をもって英語を発話しながら学習することが難しい。
- ・どの活動をメインにしたらいいのかなど、活動の軽重がつかめない。
- ・楽しいとは言ってくれますが、学んでいるかは疑問です。これでいいのか。
- ・授業の進め方が、子ども達に興味や関心をもてるようにできているのだろうか。
- ・クラス人数が少なく『英語ノート』だけでは、1 時間もたないので教材作成に悩む。
- ・ゲーム活動など楽しくできる授業案がなかなか思いつかない。

こうした課題の背景には、相当数の指導者は、『英語ノート』に例示されている各活動を行うことが精一杯で、その目的を十分に理解することなく、授業を行っている現状があるのではないだろうか。このことについて金森（2012）は、「様々な指導法や活動がありますが、それぞれ何のために行うのか、目的を明確にしていないと、表面的には授業が活性化しているように見えても、本質の部分で成功していない場合もあります。

（※3）」と述べている。つまり、外国語活動を充実させるためには、指導者が活動の目的を十分理解したうえで授業を実践することが不可欠であり、それがこれからの外国語活動の課題であると考えられる。

2 研究のねらいと内容

本研究は、指導者が児童や地域の実態等に応じた外国語活動の授業改善を主体的に行うための基本的な考え方を提示することをねらいとする。具体的には、村野井（2006）が提唱する第二言語習得の認知プロセス（※4）に基づいたスモールステップを設定し、それを用いて『英語ノート』の各単位時間の展開を考え、単元計画を作成することとした。スモールステップの設定によって、『英語ノート』の各活動の目的が明らかになれば、指導者は児童や地域の実態等に応じた各単位時間の展開や単元計画の作成ができ、外国語活動の授業改善を図ることができる考えた。また、個々の活動の目的が明らかになることにより、指導者は発問・指示の工夫が行え、児童は達成感を味わい、意欲の向上につながると考えた。

研究内容は、以下の2点である。

- ①第二言語習得の認知プロセスに基づくスモールステップの設定
- ②スモールステップを用いた各単位時間の展開と単元計画の作成

（1）第二言語習得の認知プロセスに基づくスモールステップの設定

第二言語習得の認知プロセス（以下、認知プロセス）とは、外国語が使えない状態から、使えるようになるまでの間に、学習者内部で起こる変化の過程である。村野井（2006）は Gass（1997）のモデルを参考に、認知プロセスと英語の指導技術との関係を図1のように提案し、認知プロセスの流れに沿った英語指導をすることが英語習得に効果的であると述べている。

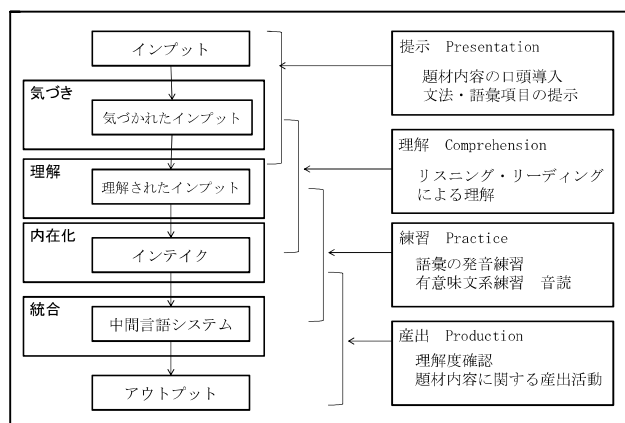


図1 第二言語習得の認知プロセスと PCPP による第二言語指導 村野井（2006）p. 23
一部改変

小学校の外国語活動は、英語を聞いたり話したりする体験的な活動を通して、コミュニケーション能力の素地を養うことを目指すものであり、中学校の英語学習のように英語の習得を目的としていない。しかし、児童の内部で起こる変化に留意して授業を進めれば、指導者は児童の内部変化に沿って、指導の工夫を行うことが可能となり、児童の実態に応じた授業改善を図ることができる。また、児童は適切な負荷を与えられることにより、達成感を味わい意欲を向上させると考えた。そこで、各活動の目的を顕在化させた各単位時間の授業展開と単元計画のモデル作成のため、認知プロセスを基に表1に示す各スモールステップを設定することとした。

表 1 認知プロセスに基づく各スモールステップの目的及び活動例

認知プロセス		外国語活動のスモールステップの目的及び活動例
気づき	学習者は、自分の耳や目を通して入ってくる言語に注意を向ける。	気づきのスモールステップ 目 的：聞こえてきた音声に注意を向けること 活動例：英語の音声を日本語との違いや特徴に注意して聞く活動
		理解のスモールステップ 目 的：理解を促す補助教材等を見ながら、音声を繰り返し聞いたり聞こえた通りに言ったりすることで語彙や表現の意味や使い方を類推すること 活動例：絵やジェスチャー等を見ながら音声を聞く活動 歌やリズムに乗せてまねながら英語の音声に親しむ活動
内在化	話したり書いたりすることにより学習者は、「理解のプロセス」で立てた仮説を検証する。	内在化のスモールステップ 目 的：語彙や表現を口に出して言い、児童自身がその意味や使い方が正しいのかを確かめること 活動例：ペアで表現を使い、児童自身が自分の語彙や表現に関する理解が正しいかどうかを確認する活動
		統合のスモールステップ 目 的：語彙や表現を自動的・瞬間的に使うこと 活動例：絵や写真を見て、すぐに英語で答える活動
統合	学習者は、言語を長期記憶として貯蔵し、自動的・瞬間的に使いこなせるようになる。	運用のスモールステップ 目 的：自分の思いや考え等を既習表現を使って伝えること 活動例：児童同士が自分の選んだものや考え等を既習表現を用いて交流する活動 日常生活場面でのコミュニケーション活動

以下に、設定した5つのスモールステップについて詳説する。

ア 気づきのスモールステップ

認知プロセスの最初は、「気づき」である。このプロセスにおいて、学習者は、自分の耳や目を通して入ってくる言語に注意を向ける。意味を理解することはできなくても、音の一部を聞き取ることができていれば、注意を向けていると言える。

本研究では、「聞こえてきた音声に注意を向けること」を「気づきのスモールステップ」の目的とする。活動例としては、英語の音声の日本語との違いや特徴に注意して聞く活動がある。

イ 理解のスモールステップ

「気づき」に続くプロセスは「理解」である。このプロセスにおいて、中間言語の仮説形成が行われると考えられている。村野井(2006)は、Selinker(1972)が提唱した中間言語について、「学習者の言語のことで、第二言語学習途上の学習者の言語システムを総称したものである。母語と目標言語の中間にある言語という意味で使われている。(※5)」と述べている。つまり、第二言語にも母語にも属さない学習の過程で生じる不完全な言語のことを意味すると考える。また、仮説形成については、村野井(2006)は「学習者が言語データの中に規則性を見つけ、言語形式・意味・機能の間の関係に関して一種の仮説を立てること(※6)」と説明している(文中の言語形式・意味・機能について can を例に挙げると、言語形式は「助動詞」、意味は「～できる」、機能は「可能」となる)。つまり、学習者が、言語を何度も聞いたり、繰り返して言ったりしているうちに、「この音声はこんな意味だろう」「このことをする時にはこの表現を使えばいいのだろう」等と与えられた表現について仮説を立てていくことを意味すると考える。

本研究では、「理解を促す補助教材等を見ながら、音声を繰り返し聞いたり聞こえた通りに言ったりすることで語彙や表現の意味を類推すること」を「理解のスマールステップ」の目的とする。活動例としては、以下の2種類が考えられる。一つは、絵やジェスチャー等を見ながら音声を聞く活動である。『英語ノート』Let's Listenの活動において補助教材として『英語ノート』の絵を見ながら音声を聞き、選択肢のひとつを選んだり、線を引いて絵を結んだりする活動がこれにあたる。もう一つは、チャンツのように歌やリズムに乗せてまねながら音声に慣れ親しむ活動である。

ウ 内在化のスマールステップ

第三のプロセス「内在化」について村野井（2006）は、「仮説に基づいて行った発話が、相手にうまく理解された場合には、仮説は認証される。逆に、伝わらない、誤解された、などという場合には、仮説は正しくなかったわけで、仮説を修正したり、棄却したりすることとなる。（※7）」と述べている。このプロセスにおいて学習者が、「理解」のプロセスで形成した仮説に基づいて話したり書いたりすることにより、言語知識（言語形式・意味・機能）の定着を進めると考えられる。

本研究では、「語や表現を口に出して言い、児童自身がその意味や使い方が正しいのかを確かめること」を「内在化のスマールステップ」の目的とする。活動例としては、ペアで語彙や表現を使うことを通して、児童自身が自分の語彙・表現の意味や使い方が正しいかどうかを確認する活動がある。

エ 統合のスマールステップ

第四のプロセス「統合」について村野井（2006）は、「忘れることなく、言語知識が自由に瞬間的に使える長期記憶として学習者の中間言語システムに組み込まれていくプロセスが統合である。（※8）」と説明している。

本研究では、「語彙や表現を自動的・瞬間的に使うこと」を「統合のスマールステップ」の目的とする。活動例としては、児童が絵や写真を見て、それが何かを即座に英語で答える活動がある。

オ 運用のスマールステップ

本研究では、アからエの認知プロセスに基づいた4つのスマールステップに加え、「運用のスマールステップ」を設けている。兼重・直山（2008）は、「最後に、それらを自分の立場で選び、自分の思いをのせて発話する活動が必要である。これがあってこそ、児童は自己表現をし、児童どうしあるいは指導者と児童とでコミュニケーションを取ったことになる。（※9）」と『英語ノート』の単元最終時の活動の重要性を述べている（文中の「それら」とは学習した言語材料を意味する）。本研究においても、単元最終時の活動の目的を明らかにするため、「自分の思いや考えを既習表現を使って伝えること」を目的とした「運用のスマールステップ」を設定することとした。活動例としては、スピーチや日常生活の場面を設定したコミュニケーション活動の中で、自分の選んだものや考えを既習表現を用いて話す活動がある。

（2）スマールステップを用いた各単位時間の展開と単元計画の作成

図2はスマールステップに基づいた各単位時間の展開のモデルを表したものである。各単位時間については、「気づき」「理解」「内在化」「統合」の順に学習を積み上げていく。

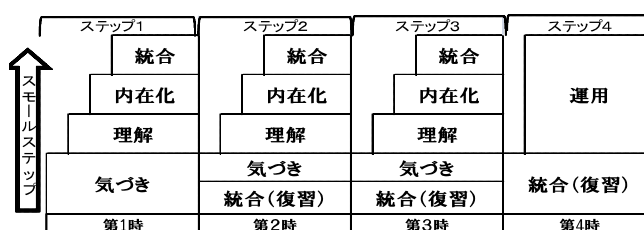


図2 スモールステップに基づいた各単位時間の展開モデル

なお、本研究では第1時から第4時の各単位時間を、それぞれの語彙と表現を学習するための「ステップ1～4」とし、各「ステップ」を達成するための各単位時間の活動を「スモールステップ」とした。

図3は、『英語ノート2指導資料』Lesson6の単元計画、図4は本研究において作成した同じLesson6の単元計画である。これら二つの図を比較しながら、「スモールステップ」「取り扱う語彙や表現」「復習としての統合のスモールステップ」に焦点を当て、各単位時間の展開と単元計画について説明する。なお、『英語ノート2』Lesson6では行きたい国や行きたい理由を考えることで、様々な国々についての興味・関心を深める活動を行っている。

ア スモールステップ

『英語ノート指導資料』授業案例では、単元全体を見ると「気づき」「理解」「内在化」「統合」のプロセスに沿って構成されていると考えられる。しかし、各単位時間については、例えばLesson6の第2時では、「理解のスモールステップ」が複数設定されているように、必ずしも認知プロセスに沿った展開でないと考える。本研究においては、1単位時間の授業展開は、「気づき」から「統合」のスモールステップに基づいて活動を設定することとした。

イ 取り扱う語彙や表現

『英語ノート指導資料』授業案例では、各単位時間に複数の語彙や表現を取り扱っている。本研究においては、指導者が各活動の目的を意識しやすいように、1単位時間に取り扱う語彙や表現を限定することとした。

時	第1時	第2時	第3時	第4時
1単位時間の言語材料	国名 I want to go to～. I want to eat/play～.	I want to go to～. I want to eat/play～.	I want to go to～. I want to eat/play～.	国名 I want to go to～. I want to eat/play～.
活動名	Let's Listen	Let's Chant	Let's Chant	Let's Chant
スモールステップ	気づき	理解	理解	統合
活動名	Let's Listen 2	Let's Listen 1	Let's Listen	Activity 1
スモールステップ	理解	気づき	理解	統合
活動名	Let's Chant	Let's Play	Activity 1	Activity 2
スモールステップ	気づき	理解	内在化	運用
活動名		Let's Listen 2		
スモールステップ		理解		

図3 『英語ノート2指導資料』Lesson6の単元計画

時	第1時	第2時	第3時	第4時
1単位時間の言語材料	国名	I want to go to～.	I want to see/eat/play～.	国名 I want to go to～. I want to see/eat/play～.
活動名	国名クイズ	先生の好きな国あてクイズ	先生の好きな国あてクイズ	この国で见たい! 食べたい! したい!
スモールステップ	気づき	統合	統合	統合
活動名	ビンゴゲーム	想像して聞こう	ジェスチャークイズ	入国審査ゲーム
スモールステップ	理解	気づき	気づき	運用
活動名	Let's Listen	Let's Listen	Let's Chant	
スモールステップ	内在化	理解	理解	
活動名	国名Q & A	シークレットカードゲーム	絵合わせゲーム	
スモールステップ	統合	内在化	内在化	
活動名		Let's Chant	インタビューゲーム	
スモールステップ		統合	統合	

図4 本研究におけるLesson6の単元計画

ウ 復習としての統合のスモールステップ

外国語活動は週に1コマ程度しか行われないことが多いため、前時に扱った語彙や表現が児童の記憶にとどまっていない場合も考えられる。そこで前時の語彙や表現を思い出させるため、第2時から第4時の最初に復習としての「統合のスモールステップ」を設けることとした。

3 研究の実践

(1) 概要

ア 検証授業実施状況

検証授業は、表 2 に示すように研究協力校 2 校で実施した。岩出市立山崎北小学校では第 5・6 学年のそれぞれ 1 クラスで、研修員が Lesson 5 を、学級担任が Lesson 6 を担当し、残りのクラスはすべて外国語活動担当教員が授業を行った。有田川町立藤並小学校では第 6 学年の 1 クラスで、Lesson 6 を研修員と ALT との TT で行い、他のクラスは外国語活動担当教員と ALT との TT で行った。Lesson 7 についてはすべてのクラスを外国語活動担当教員と ALT で行った。

表 2 検証授業実施状況

実施校	岩出市立山崎北小学校		有田川町立藤並小学校
実施時期	10 月上旬～12 月中旬		10 月下旬～12 月中旬
対象学年 クラス数	第 5 学年 5 クラス	第 6 学年 4 クラス	第 6 学年 3 クラス
児童数	147 名	131 名	104 名
単元	『英語ノート 1』 Lesson 5, 6	『英語ノート 2』 Lesson 5, 6	『英語ノート 2』 Lesson 6, 7
授業時数	72 時間		24 時間
指導形態	日本人教員単独		日本人教員と ALT との TT

イ 検証授業の進め方

研究協力校 2 校で行う 2 単元分の検証授業は、図 5 に示す授業改善のための PDSA サイクルに沿って進めることとした。米統計学者ウィリアム・E・デミングが提唱した PDSA サイクルは、計画(Plan)、実行(Do)、評価(Study)、改善(Action)の過程を通して螺旋状に品質の維持向上や継続的な業務改善活動を推進するマネジメント手法である。具体的には、P (Plan) においては、スモールステップを用いた学習指導案・単元計画を作成し、D (Do) においては、検証授業を実施した。S (Study) においては、毎授業後に研究協議を設け授業検証を行った。A (Action) においては研究協議での意見を踏まえて修正・改善点の整理を行い、次時の P (Plan) に反映させ螺旋状に授業改善を進めた。

研究協議は、研修員及び研究協力校の学級担任と外国語活動担当教員で行い、スモールステップの設定によって明らかになった活動の目的に照らし、指導内容や発問・指示が適切であったかについて修正・改善を実施した。

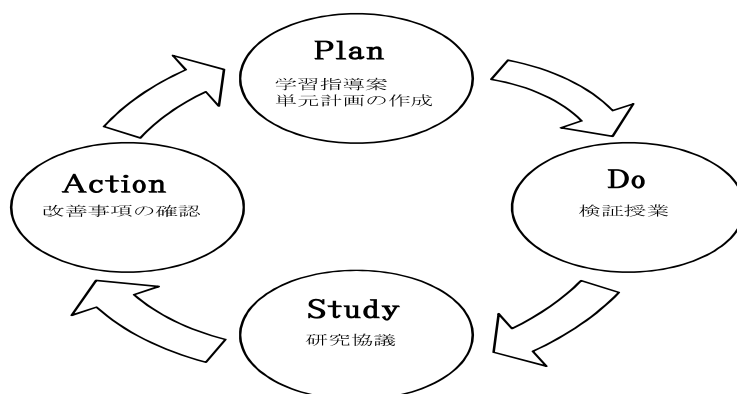


図 5 PDSA サイクル

ウ ふりかえりカード

図6は児童に記入させる『英語ノート2』Lesson6第2時の「ふりかえりカード」の例である。「ふりかえりカード」は4段階のリカート・スケールを用い、「児童が各活動の目的を達成できていたかどうか」を調査するための質問7項目と「学習意欲」を調査するための記述回答による質問2項目で構成されている。なお、すべてのスモールステップの活動の目的について質問事項を設定し、調査することができなかったため、調査を行えたものについてのみ分析することとした。リカート・スケールは、「よくできた」4点、「だいたいできた」3点、「あまりできなかった」2点、「ぜんぜんできなかった」1点とし、各項目の平均点を算出した。本研究では、全体の80%にあたるリカート・スケールの平均値3.2を「児童が概ね活動の目的を達成できた」と判断する基準とした。

☆☆☆ ふりかえりカード ☆☆☆

()年 ()組 ()

今日の授業をふりかえって書きましょう。

1 今日の活動(行ってみたい国を伝えよう)は、よくわかりましたか。あてはまる番号に○をつけてください。

よくできた 1	だいたい できた 2	あまり できなかった 3	ぜんぜん できなかった 4
①「先生の好きな国あてクイズ」で国名を言うことができましたか。			
1	2	統合(復習)のスモールステップの活動	
②「想像して聞こう」で、「～に行きたい」の言い方を注意して聞くことができましたか。			
1	2	気づきのスモールステップの活動	
③「想像して聞こう」で、「～に行きたい」の言い方をまねて言うことができましたか。			
1	2	3	4
3, 4に○をした人はなぜそう思いましたか。あてはまる理由に○をつけてください。			
() 英語の言い方がむずかしかったから () 先生の説明がむずかしかったから			
() 何をすればいいかわからなかったから () その他 []			
④「レッツ・リッスン」で、「～に行きたい」を聞くことができましたか。			
1	2	理解のスモールステップの活動	
3, 4に○をした人はなぜそう思いましたか。あてはまる理由に○をつけてください。			
() 英語の言い方がむずかしかったから () 先生の説明がむずかしかったから			
() 何をすればいいかわからなかったから () その他 []			
⑤「シークレットカードゲーム」で、「～に行きたい」と正しく言えているか分かりましたか。			
1	2	内在化のスモールステップの活動	
3, 4に○をした人はなぜそう思いましたか。あてはまる理由に○をつけてください。			
() 英語の言い方がむずかしかったから () 先生の説明がむずかしかったから			
() 何をすればいいかわからなかったから () その他 []			
⑥「レッツ・チャンツ」で、「～に行きたい」を言うことができましたか。			
1	2	統合のスモールステップの活動	
3, 4に○をした人はなぜそう思いましたか。あてはまる理由に○をつけてください。			
() 英語の言い方がむずかしかったから () 先生の説明がむずかしかったから			
() 何をすればいいかわからなかったから () その他 []			
⑦「～へ行きたい」の言い方が分かりましたか。			
1	2	3	本時のめあて

2 今日の授業の感想をできるだけたくさん書いてね。(初めて知ったこと、よかったこと、むずかしかったことなど)

3 習ったことを使って何をしたいですか。

図6 ふりかえりカード例

(2) 各スモールステップの実践例

以下に、各スモールステップの目的に沿った活動内容及び指導の工夫を例示する。

ア 気づきのスモールステップ

(ア) 活動例

『英語ノート1』Lesson 6 「What do you want? 外来語を知ろう」

第1時「違いはなあに」

目的	英語の音声に注意を向けること
活動内容	gorilla, television 等の絵を見て、英語の音声を聞く。
指導の工夫	- 英語の音声の特徴に気づかせるために、絵を見せて、まず日本語で答えさせてから、英語の音声を聞かせる。 - 音声に注意を向けさせるための指示をする。 (発問・指示例)「日本語と同じかどうか聞きましょう。」 「どんなふうに聞こえたのか言える人はいますか。」

(イ) ふりかえりカードから

上記の活動を行った後には、次のような感想があった。

- ・ 外来語と英語は、はつ音がとてもちがうことがわかりました。
- ・ 「ゴリラ」のことが「ガリラ」だったのでびっくりしました。
- ・ わたしは、「テレビ」は英語だと思っていました。だけど、英語では「テレビジョン」だったのはびっくりしました。

児童は、「気づきのスモールステップ」の活動において、「ゴリラ」と“gorilla”等の外来語と英語の音声の違いや「テレビ」と“television”等の音声の特徴に注意して、英語の音声を聞くことができていたと考えられる。

表3は各単位時間における「気づきのスモールステップ」での活動の目的を児童が達成できたかどうかについて、ふりかえりカードによって調査した結果を表したものである。また、図7、図8は本研究において「児童が概ね活動の目的を達成できた」とする基準値3.2との比較を学年別に示したものである。なお、第6学年のLesson5第3時については新出表現を取り扱わなかったため調査を行っていない。また、第6学年のLesson7については、「気づきのスモールステップ」の活動は行ったもののふりかえりカードでは「気づき」に関する達成感を問う質問項目を設定していなかったため、調査結果を記載していない。

表3 気づきのスモールステップにおける平均値と標準偏差

	第1時		第2時		第3時	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
5年L5	3.86	0.44	3.83	0.57	3.51	0.41
5年L6	3.76	0.50	3.86	0.35	3.80	0.40
6年L5	3.45	0.67	3.51	0.83		
6年L6	3.72	0.45	3.78	0.42	3.56	0.43

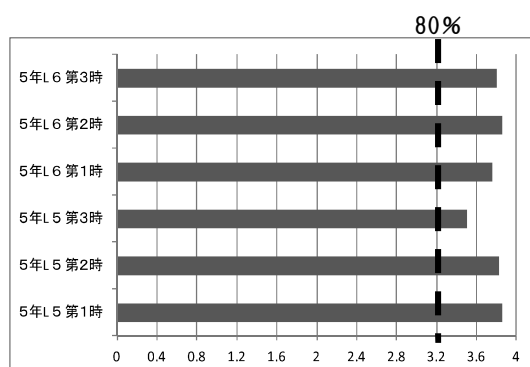


図7 気づきのスモールステップ（5年）

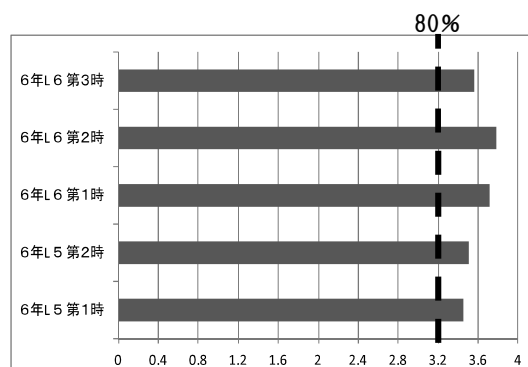


図8 気づきのスモールステップ（6年）

これらの表と図に示す結果からも、両学年とも児童の多くは「聞こえてきた音声に注意を向ける」という「気づきのスモールステップ」の目的を概ね達成できていたと考える。

イ 理解のスモールステップ

(ア) 活動例

『英語ノート 1』 Lesson 6 「What do you want? 外来語を知ろう」

第2時「欲しいものを質問しよう」

目的	“What do you want?” の意味や使い方を類推すること
活動内容	店員と客の写真を見ながら、チャンツのリズムに合わせて聞こえた通りに、繰り返し言う。
指導の工夫	・チャンツを聞かせる前に会話の場面がわかるようにレストランの場面での店員とのやりとりのデモンストレーション等を行う。

(イ) ふりかえりカードから

上記の活動を行った後には、次のような感想があった。

- ・英語が少し聞き取れなかったけど少し分かるようになりました。
- ・チャンツは初めはわからなかったけどおもしろかった。
- ・言った言葉をおぼえることができました。
- ・何がほしいですか？が上手にいえた。
- ・質問だけでなく食べ物も覚えられてよかったと思いました。

児童は、「理解のスモールステップ」の活動において絵カードを見ながら音声を聞いたり聞こえた通りに言ったりすることで、“What do you want?” の意味（何がほしいですか）を類推することができたと考えられる。

表 4 及び図 9、図 10 は前頁の「気づきのスモールステップ」の調査結果と同様に「理解のスモールステップ」での活動の目的を児童が達成できたかどうかを表しているものである。なお、第6学年の Lesson 5 第3時については新出表現を取り扱わなかったため、調査を行っていない。

表 4 理解のスモールステップにおける平均値と標準偏差

	第1時		第2時		第3時	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
5年L5	3.51	0.83	3.73	0.38	3.65	0.61
5年L6	3.76	0.43	3.76	0.50	3.71	0.51
6年L5	3.69	0.59	3.42	0.71		
6年L6	3.66	0.48	3.75	0.39		
6年L7	3.58	0.55	3.46	0.49	3.44	0.50

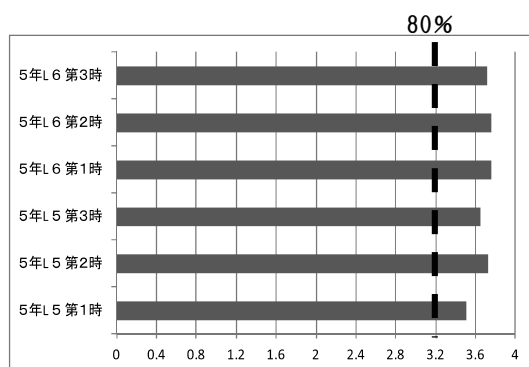


図 9 理解のスモールステップ（5年）

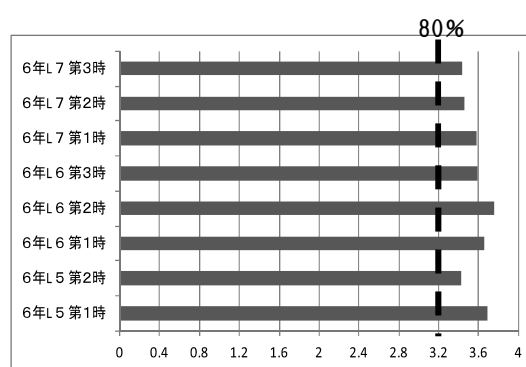


図 10 理解のスモールステップ（6年）

これらの表と図に示す結果から、両学年とも「理解を促す補助教材等を見ながら、音声を繰り返し聞いたり聞こえた通りに言ったりすることで語彙や表現の意味や言い方を類推する」という「理解のスマールステップ」の目的を概ね達成できたと考ええる。

ウ 内在化のスマールステップ

(ア) 活動例

『英語ノート2』Lesson 5 「Turn right. 道案内をしよう」

第3時「同じ町を作ろう」

目的	道案内の言い方“Go straight. Turn left / right. Stop.”を実際に使い、意味や使い方が正しいかどうかを確認すること
活動内容	ペアの一人が机の上に自由に絵カードを並べて町を作り、道案内をする。たどり着いた場所が案内した場所と同じかどうか確認する。
指導の工夫	・ 違う場所にたどり着いてしまった場合は、どこで間違ったのか何と云えばよかったのか、確認させる。 (指示例)「道案内が終わったら、たどり着いた場所を確認しましょう。」 「到着した場所が違う場合は、どこで間違ったのか、何と云えばよかったのかをペアで確認しましょう。」

(イ) ふりかえりカードから

上記の活動を行った後には、次のような感想があった。

- ・ 前回よりきちんと道案内をちゃんと聞けたし、言えた。楽しくできた。
- ・ 最後のゲームの相手の言葉は聞き取れたけど、右と左が分からなくてたどりつかなかった。
- ・ 楽しかった。でもストップの場所がおかしかったから、次遊びでするとき、ちゃんと案内できるようにがんばりたい。

児童は自分が話した道案内に必要な表現“Go straight. Turn left / right. Stop.”の意味や使い方について、児童自身で間違いに気付くことができたり、正しく理解していることを確認できたりしていたと考えられる。

さらに次の感想にあるように、児童は道案内に必要な表現の意味や使い方の正しさや間違いに気づくだけでなく、児童同士でも表現を教え合い、お互いに表現の修正を行うことができていたと考えられる。

- ・ まちがえてちがうところに行ったから難しかった。あとで、先生におしえてもらってなっとくした。
- ・ 言い方を忘れたとき先生に聞くとできたのでうれしかったです。
- ・ 英語でいうのはむずかしかったです。Oさんがおしえてくれたのでうまくいえました。よかったと思いました。
- ・ きんちょうして何を言ったらいいか分からなくなりました。でもIさんがおしえてくれました。すごくうれしかったです。

表5及び図11、図12は前頁と同様に「内在化のスマールステップ」での活動の目的を児童が達成できたかどうかを表しているものである。

表5 内在化のスマールステップにおける平均値と標準偏差

	第1時		第2時		第3時	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
5年L5	3.96	0.38	3.86	0.35	3.93	0.26
5年L6	3.83	0.38	3.83	0.38	3.78	0.31
6年L5	3.51	0.56	3.84	0.44	3.62	0.83
6年L6	3.66	0.48	3.82	0.44	3.61	0.42
6年L7	3.56	0.55	3.57	0.49	3.53	0.49

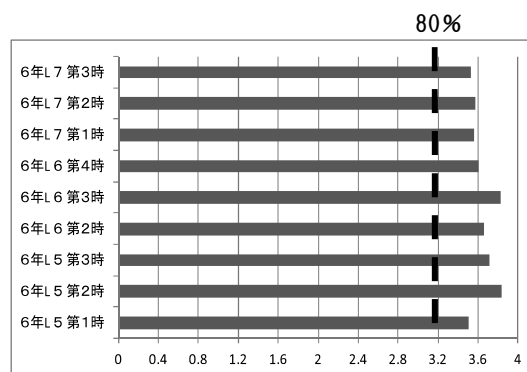
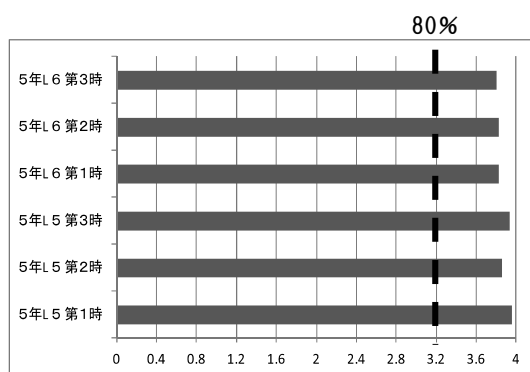


図 11 内在化のスモールステップ（5 年） 図 12 内在化のスモールステップ（6 年）

これらの表と図に示す結果から、両学年とも「語彙や表現を口に出して言い、児童自身がその意味や使い方が正しいのかを確かめる」という「内在化のスモールステップ」の目的を概ね達成できたと考える。

エ 統合のスモールステップ

（ア）活動例

『英語ノート 2』Lesson 7 「What time do you get up? 自分の一日を紹介しよう」
第 1 時「今、何時ゲーム」

目的	時刻の言い方を自動的・瞬間的に使うこと
活動内容	時計カードを見て、“What time is it?” の問いに答える。
指導の工夫	時計カードを用いて、テンポよく何度も言わせる。

（イ）ふりかえりカードから

上記の活動を行った後には、次のような感想があった。

- ・時刻の言い方がよく分かりました。
- ・時刻をえいごでいえるようになってよかったです。
- ・時刻の言い方がすこしむずかしかったけどできた。
- ・時刻の言い方がいがかんたんだった。
- ・今、何時何分か聞いたり話したりするのがよくわかりました。
- ・じこくのいいかたがとても分かりやすかったので、よくわかった。ぜんぜんむずかしくなかった。
- ・「今、何時ゲーム」をよく分かったし、とても楽しかったです。

児童は、「統合のスモールステップ」の活動において、時刻の言い方に慣れ親しみ、自信をもって言えるようになってきたと考えられる。

次の表 6 及び図 13、図 14 は「統合のスモールステップ」での活動の目的を児童が達成できたかどうかを表しているものである。なお、各学年の Lesson 5、6 の第 1 時、第 2 時については、時間の都合で設定した活動を行うことができなかったため、調査を行っていない。

表 6 統合のスモールステップにおける平均値と標準偏差

	第1時		第2時		第3時		第4時	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
5年L5					3.51	0.58	3.93	0.26
5年L6					3.73	0.52	3.82	0.38
6年L5					3.46	0.62	3.67	0.48
6年L6					3.78	0.42	3.62	0.61
6年L7	3.50	0.60	3.51	0.64				

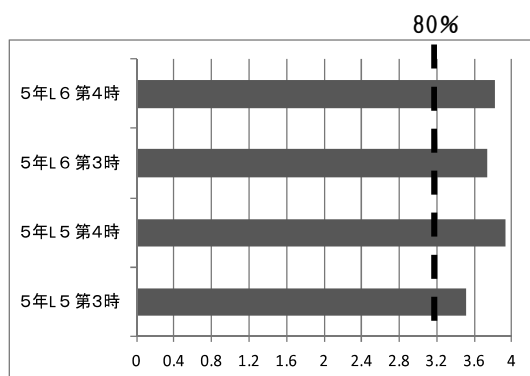


図 13 統合のスマールステップ（5年）

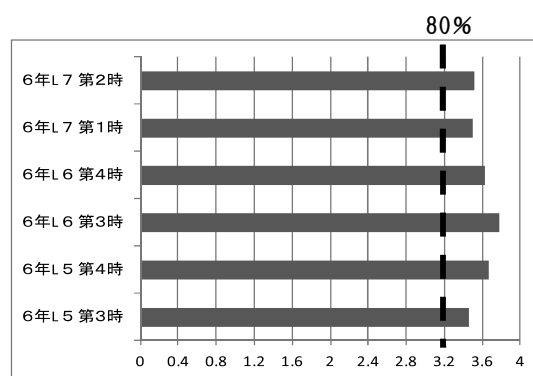


図 14 統合のスマールステップ（6年）

これらの表と図に示す結果から、両学年とも「語彙や表現を自動的・瞬間的に使う」という「統合のスマールステップ」の目的を概ね達成できたと考える。

オ 運用のスマールステップ

（ア）活動例

『英語ノート1』Lesson 5 「I don't like blue. いろいろな衣装を知ろう」
第4時「お気に入りの服を紹介しよう」

目的	自分のお気に入りの服を既習表現を使って伝えること
活動内容	前時のショッピングゲームで集めたお気に入りの服を、“I have～. I like～.”の表現を使ってグループ内で紹介し合う。
指導の工夫	- 自信をもって発表できるように、発表の手順を示したシートを提示する。 - 聞き手に発表者のよいところを一言ずつ言わせるなど互いに聞く態度の育成を図る。

（イ）ふりかえりカードから

上記の活動を行った後には、次のような感想があった。

- ・私の買った服や私の好きな色をみんなに伝えることができました。英語を言ったり聞いたりするのが上達してきた気がします。もっと上達して外国に行ってみたいです。
- ・服の紹介も上手に出来たし、友達にほめてもらったからうれしかったし、よかった。
- ・友達にお気に入りの服を紹介するときにとってもはずかしかったけど言えてうれしいです。
- ・今日服のしょう介ははずかしかったけどちゃんといえました。また服のしょう介をしたいです。
- ・今日最後に自分がかった服をしょう介しました。はずかしかったけどおもしろかったです。
- ・自分のお気に入りの服のしょうかいのしかたを初め知った。上手く言えたので良かった。また買い物をして、またしょう介したいです。

児童は、発表を行うことでコミュニケーションを楽しみ、友達にほめられることにより満足感や上達感を味わい、自信を持って自分の選んだ服を“I have ～. I like ～.”を使って紹介することができていたと考えられる。

次頁の表 7 及び図 15, 図 16 は「運用のスマールステップ」での活動の目的を児童が達成できたかどうかを表しているものである。

表 7 運用のsmallステップにおける平均値と標準偏差

	第4時	
	平均	標準偏差
5年L5	3.46	0.74
5年L6	3.86	0.35
6年L5	3.80	0.48
6年L6	3.75	0.51
6年L7	3.56	0.60

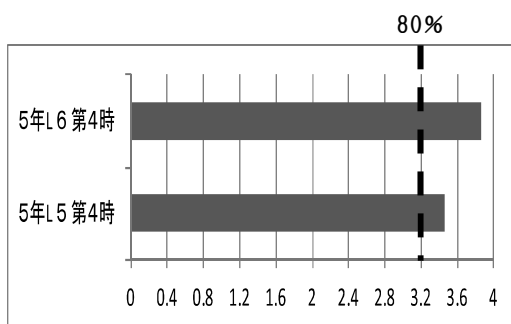


図 15 運用のsmallステップ (5年)

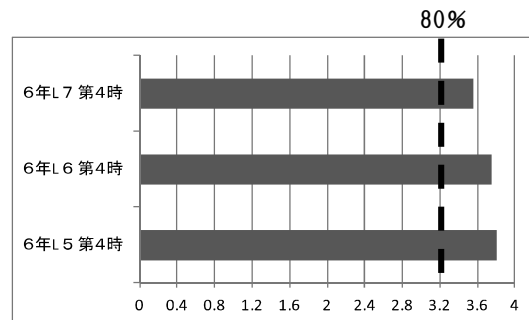


図 16 運用のsmallステップ (6年)

これらの表と図に示す結果から、両学年とも「自分の思いや考え等を既習表現を使って伝える」という「運用のsmallステップ」の目的を概ね達成できたと考ええる。

(3) 各スモールステップの指導上の留意点

検証授業の結果からまとめた「気づき」「理解」「内在化」「統合」「運用」の各スモールステップにおける指導上の留意点を図 17 に示す。

スモールステップ	指導上の留意点
気づき	目的：聞こえてきた音声に注意を向けること ①英語の音声に注意を向けさせるための指示をする。 (指示例)「日本語と同じかどうか聞きましょう。」 ②日本語と英語の音声似ているものから聞かせる等, 音声教材の提示の順序を工夫する。 ③児童のつぶやきを拾い, 全体の理解につなげる。 ④音声活動が苦手な児童には, 視覚的補助(絵カードやジェスチャー等)を行う。
理解	目的：理解を促す補助教材等を見ながら, 音声を繰り返し聞いたり聞こえた通りに言ったりすることで語彙や表現の意味や使い方を類推すること ①語彙や表現の意味や使い方を類推させるための指示をする。 (指示例)「(絵を見ながら)ケンがどこの国に行きたいのか聞きましょう。」 「(ジェスチャーを見ながら)何を言っているのか想像して聞きましょう。」 ②再度聞かせたり, 区切ったりして聞かせる。 ③音声を繰り返し聞かせてから, 聞こえた通りに言わせる。 ④活動に変化を持たせ, 飽きさせずに繰り返し聞かせたり言わせたりする。 (テンポ, 男女別等)
内在化	目的：語彙や表現を口に出して言い, 児童自身がその意味や使い方が正しいのかを確かめること ①語彙や表現の意味や使い方が正しいかどうか確かめるためのコミュニケーション活動を設定する。 ②間違いを恐れず, 一人一人が積極的にコミュニケーション活動を行える雰囲気をつくる。 ③間違いや曖昧さを否定せず, 声に出して言ったことや言おうとしたことをしっかりとタイミングよくほめる。
統合	目的：語彙や表現を自動的・瞬間的に使うこと ①絵や写真を児童の興味や関心に合わせて活用する。 ②テンポよく何度も使わせる活動(ICT教材を活用する等)を行う。 ③問いに英語で答えさせる指示をする。 (指示例)「カードを見て英語で答えましょう。」
運用	目的：自分の思いや考え等を既習事項を使って伝えること ①慣れ親しんだ表現を活用し, 日常生活に近いコミュニケーションの場面を設定する。 ②自信をもって発表できるように, 一人やペアで練習する等, 準備の時間を確保する。 ③発表の手順を示したシートを提示する。 ④聞き手は, 発表者のがんばりを認めるなど互いに発表しやすい雰囲気をつくる。

図 17 各スモールステップにおける指導上の留意点

(4) スモールステップを用いた学習指導案例

Lesson 6 第2時		
・ 本時の目標 行ってみたい国を伝える。 ・ 扱う表現 I want to go to ~. ・ 扱う語彙 France, Korea, Australia, Japan, Italy, Brazil, China, America, Egypt		
過程	児童の活動	指導者の活動 ●指導の留意点 (図 17 参照) ◎評価の観点
挨拶	あいさつ Hello. I'm fine/happy/hungry.	・ 英語で全体にあいさつをする。 ・ 授業のスケジュールを示す。
展開	先生の好きな国あてクイズ ・ 3 ヒントを見て、連想した国名を言う。	統合 国名の言い方を思い出す。 ● 問いに答えさせる指示をする。(統合③) 「3つの写真から連想する国を英語で答えましょう。」 ● ICT教材を使って、テンポよく絵や写真のヒントを見せて国名を言わせる。(統合②)
	・ めあてを確認する。	・ 本時のめあてを提示する。 「行ってみたい国を伝えよう。」
	想像して聞こう ・ 「～に行きたい」という言い方に気づく。 ・ 「～に行きたい」をまねて言う。	気づき 聞こえてきた音声に注意を向ける。 理解 音声をまねて「～に行きたい」と言い、意味を類推する。 ● 英語の音声に注意を向けさせるための指示をする。(気づき①) 「どんな英語が聞こえるか、注意して聞きましょう。」 I like pizza. I like soccer. I want to go to Italy. ● “I want to go to ~.”の意味や使い方を類推させるための指示をする。(理解①) 「何と言っているか想像して聞きましょう。(飛行機のペープサートを動かす)」 ● 音声を繰り返し聞かせてから、聞こえた通りに言わせる。(理解③)
	Let's Listen ・ 「～に行きたい」に注意して聞き取る。 ・ 聞き取れた国名を発表する。	理解 「～に行きたい」の言い方を聞き、意味を類推する。 ● 語彙や表現の意味や使い方を類推させるための指示をする。(理解①) 「ケンがどこに行きたいのかに注意して聞きましょう。」 ・ 積極的に聞き取れた児童をほめる。
	シークレットカードゲーム ・ ペアになり、国旗カードを分ける。 ・ じゃんけんで勝った人は相手のカードの中から行きたい国を言い、カードをもらう。 ・ 最後にシークレットカードをもっていた方が勝ち。	内在化 意味や言い方が正しいかどうか児童自身が確かめる。 ・ ゲームのやり方を児童とデモンストレーションする。 「『～に行きたい』と正しく言えればカードがもらえます。言い方が分からない時は、教え合ひましょう。」 ● 机間巡視をして、間違いや曖昧さを否定せず、声に出して言ったことや言おうとしたことをしっかりとほめる。(内在化③) ◎「I want to go to ~.」を使って行ってみたい国を伝えている。 【慣れ親しみ】(行動観察)
	Let's Chant ・ リズムに合わせて言う。	統合 国名を変えて「～に行きたい」と言う。 ・ チャンツ絵カードを見せ、カードに合わせて国名を変えながら言わせる。
まとめ	・ ふりかえりカードで本時を振り返る。 ・ 次時予告を聞く。 ・ あいさつ	・ 本時の授業を振り返らせる。 ・ 児童の良かった点や頑張っていた点をほめる。 ・ 次時予告をする。 ・ 英語で全体にあいさつをする。

図 18 スモールステップを用いた学習指導案

4 授業を通しての効果検証

本研究は、指導者が活動の目的を十分理解した上で外国語活動の授業を実践していくことが課題であることから、目的を明らかにし児童や地域の実態等に応じた授業改善を行うための基本的な考え方を提示することをねらいとしている。そこで、第二言語習得の認知プロセスに基づいたスモールステップを設定し、各活動の目的を明らかにし、作成した各単位時間の展開及び単元計画を用いて検証授業を実施した。以下の3点についてPDSAサイクルに基づき検証を行う。

- ①児童や地域の実態等に応じて各単位時間の展開や単元計画を作成できたか。
- ②活動の目的を理解して発問・指示を工夫できたか。
- ③授業改善のための課題や視点を明らかにし、研究協議を行えたか。

(1) Plan

児童の実態に応じた授業改善の手立てとして、児童の内的変化に着目したスモールステップを設定した。『英語ノート』の各活動の目的や内容が、本研究のどのスモールステップにあたるかを考えることにより、独自に児童の実態に即した授業展開を計画することができた。

各スモールステップの実践例で示したように、ふりかえりカードによる調査結果から、児童は各活動の目的を概ね達成できていた。このことから授業展開は児童の実態に即していたと考える。

指導者は研究協議において次のような意見を述べている。

- ・聞くということがスタートで、そこから「気づき」「理解」「内在化」のように段階を経て行う大切さがとてもよく分かった。スモールステップを踏んでいくと「言えること」につながるということが分かった。
- ・1つ1つの活動に目標があると次の活動を意識してできる。
- ・4時間、1単元をセットで考えておかないと児童は、しんどくなるだろうと感じました。

これらの意見から、指導者は、活動の目的を明らかにした指導と児童の内的変化を把握した授業展開を評価していることがわかる。また、『英語ノート』の各活動の目的やそれぞれの活動の繋がりがわかり、1単元を通した計画を作成する手がかりになったと考える。

- ・一時間ごとに伝えたいことや学んでほしいことを1つに絞るほうが、子どもたちは理解しやすい。
- ・いくつも大事なことを言うと印象が薄れるけど、1つのことをその授業の中で何度か繰り返すことで、印象に残りやすい。

またこれらの意見からは、1単位時間の言語材料を一つに絞ることにより、児童が各活動内容を理解しやすくなったと評価していることがわかる。これは検証の視点①にあてはまる。

(2) Do

Doでは、各スモールステップで目的を設定したことにより、指導者は各活動の目的に沿った発問・指示や教材の提示方法を工夫することができた。

また、認知プロセスに沿った授業展開を行うことによって児童の内的変化の状況を把握し、臨機応変な授業計画の修正や、適切な発問・指示を行うことができたと考えられる。

例えば、「統合のスモールステップ」の活動「ミッシングゲーム」で“**What's**

missing?”に答えられない児童がいた。これらの児童は、まだ「理解」や「内在化」の状態であると指導者が判断し、その場で児童の実態にあわせ、再度音声聞かせて繰り返し言わせたり（「理解のスマールステップ」の活動）、声かけをして表現や使い方を確認させたり（「内在化のスマールステップ」の活動）する支援を行うことができた。これらは検証の視点②にあてはまる。

（３）Study

Study では毎回の授業の後に研究協議を行い、各活動がスマールステップの目的に適していたかという共通の視点で協議を深めることができた。このことは各単位時間の授業展開及び単元計画の修正や発問・指示の改善につながり、授業改善を図ることができた。

例えば、「理解のスマールステップ」において、絵を示しながら音声を聞かせた後で、2回目はモデルとなる音声の後に続いて言わせるのではなく、「絵を見て答えましょう。」と「統合のスマールステップ」にあたる指示をしたことを取り上げた。研究協議の出席者は、「理解のスマールステップ」と「統合のスマールステップ」の目的や発問・指示を比較することにより、両者の違いについて理解を深めることができた。また、計画時に「理解のスマールステップ」を重要視し、複数の活動を設定していたが、実際の授業では「統合のスマールステップ」まで至らず、「内在化のスマールステップ」の活動で終わったことがあった。研究課題としてこのことを取り上げ、活動内容や進め方について意見交換を行った。これは検証の視点③にあてはまる。

（４）Action

Action ではスマールステップの目的に基づいて観察された児童の実態や協議で出された意見を、次時の授業展開及び単元計画の修正や、発問・指示の改善に活かすことができた。

例えば、上記（３）において「理解」と「統合」のスマールステップの指示を例に挙げたが、協議の結果を受け、次時の「理解のスマールステップ」の活動では「聞こえたように繰り返して言いましょう。」、「統合のスマールステップ」の活動では「絵を見て答えましょう。」と、より目的に合った指示を行うこととした。

（１）～（４）の検証から、本研究では指導者が児童や地域の実態等に応じた外国語活動の授業改善を主体的に行うための基本的な考え方の一つを提示することができたと考える。

（５）児童の様子から

授業のふりかえりカードには次のような感想があった。

- ・ 買い物の言い方は最初はあまりできなかったけど、今日はちょっとだけできるようになりました。うれしかったです。
- ・ 言い方が難しいところもあったけど、だいたいはできました！
- ・ すこし言い方がむずかしかったけど、言えました。すごくうれしかったです。
- ・ 相手に話すのが少しむずかしかったです。でもまたしたいです。
- ・ 最初難しかったけどどんどん聞き取れるようになりました。
- ・ むずかしかったけど少しできたので楽しかったです。またやりたいです。

上記の感想から児童は「むずかしい」と負荷を感じつつも「できるようになった」「聞き取れるようになりました」等、達成感や上達感を味わっていることがわかる。

- ・あまり聞くことができなかったので、しっかり聞けるようになりたい。
- ・ほかにももっとおぼえて話してみたい。
- ・習ったことでいろんなことを使ってみたいです。
- ・英語でたくさんの言葉を習ったので使っていきたいです。
- ・外国にいったら英語をつかえるからいいと思いました。外国ではたらくときつかえる。
- ・また英語で話をしてみたい。
- ・今日の授業のことを利用して生活の中で使ってみたい。
- ・もっと質問の言い方をうまくして、友達としゃべってみたいです。
- ・英語の言い方をしたけど、他のやり方も知りたい。
- ・もっと英語を知りたい。
- ・今日習ったことは他にも使い方があってと思うので、それを探したい。
- ・使えるものが増えたので、英語で会話したいです。

上記の感想から、「使っていきたい」「話をしてみたい」等の児童の意欲が感じられる言葉が見られた。また、授業中だけでなく休み時間にも複数の児童がチャンツやゲーム等の活動を行い、英語を使ってコミュニケーションをとることを楽しんでいるという報告もあった。これらの感想や報告は、児童の外国語活動に対する意欲の表れであると考えられる。

第二言語習得のための認知プロセスを基に組み立てた授業であったが、児童は適度な負荷を感じながらも意欲的に取り組むことができたと考えられる。

5 課題

本研究ではスモールステップを基に、1単位時間の展開や単元計画のモデルを組み立てることで、指導者が主体的に授業改善を行うための一つの考え方を提示できたと考えている。今後、この考え方を活用し、より多くの指導者に外国語活動の充実に努めてもらいたいと期待するが、そのためには以下2点の課題が考えられる。

1点目は、各スモールステップに基づいた授業実践のイメージを持つことが難しいことである。本研究のスモールステップは、第二言語習得理論に基づいて設定しているため、実践を進める中で少しずつ得心できることが多分にあった。例えば、2（1）で述べた「内在化のスモールステップ」の目的や4（3）で述べた「理解のスモールステップ」と「統合のスモールステップ」の指示の違いについては、実際に授業を行い、共通の視点で研究協議を行うことで理解が深められた。今後は、より多くの教員に本研究で提示した授業改善の基本的な考え方に基づく授業実践を行ってもらえるように、各スモールステップの様々な活動例を提示する必要がある。

2点目は、各単位時間に「気づき」から「統合」までの4つから5つのスモールステップの活動を設定し、計画通りに授業展開を行うことが困難であったことである。5つのスモールステップを意識して、各単位時間の展開や単元計画を立て、授業を行っていくことは児童の実態に即した授業改善においては意義がある。しかし、外国語活動においてすべての児童が「統合のスモールステップ」まで到達することは時間的にも困難であり、負担が大きいくちと考える。この問題は今後、各スモールステップの軽重バランスに配慮し、活動を柔軟に設定することで、解決できるのではないかと考える。

6 今後に向けて

外国語活動が本年度から全面実施となり、間もなく2年目を迎える。来年度からは、

外国語活動の一層の充実のため、新たな外国語活動教材、『Hi, friends!』が配布される。

新教材の大きな変更点は、単元の時数に幅を持たせ2から5時間とされていること、児童間で交流できる場面がより多く取り入れられていること等である。

『英語ノート』から『Hi, friends!』に代わることにより、指導者は外国語活動の各単位時間の展開や単元計画、年間計画について改めて検討すると考えられる。その際に、主体的に授業改善を図るための考え方として本研究を取り入れて頂ければ幸いである。

謝辞

本研究を行うにあたり、京都外国語大学 特任教授 齋藤榮二氏、京都外国語大学 教授 石川保茂氏、帝塚山学院大学 専任講師 近藤睦美氏には、研究の方向性や関連する研究等について多大のご助言やご示唆を頂きました。ここに記して、深く感謝いたします。

＜引用文献＞

- ※ 1 和歌山県教育センター学びの丘「小学校外国語活動」サイト
(http://www.wakayama-edc.big-u.jp/es_gaikokugo/es_gaikokugo.htm)
- ※ 2 日本英語検定協会 (http://www.eiken.or.jp/news/kyoukai/pdf/syou_2010_02.pdf)
- ※ 3 金森強『STEP 英語教育』財団法人日本英語検定協会 p. 28(2012)
- ※ 4 村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館 p. 10 (2006)
- ※ 5 同上 p. 6
- ※ 6 同上 p. 13
- ※ 7 同上 p. 14
- ※ 8 同上 p. 16
- ※ 9 兼重昇・直山木綿子『小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編』明治図書出版 p. 74(2008)

＜参考文献＞

- ・ 齋藤榮二『英語授業レベルアップの基礎』大修館書店 (1996)
- ・ Gass, S. *Input, interaction and the second language learner*. Mahwah, Nj: Lawrence Erlbaum Associate. (1997)
- ・ 金森強『小学校の英語教育 指導者に求められる理論と実践』教育出版(2003)
- ・ 村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店(2006)
- ・ 大石晴美『脳科学からの第二言語習得理論』昭和堂(2006)
- ・ 松川禮子・大下邦幸『小学校英語と中学校英語を結ぶ-英語教育における小・中連携』高陵社書店(2007)
- ・ 文部科学省『小学校学習指導要領』(2008)
- ・ 安彦忠彦監修 大城賢・直山木綿子編著『小学校学習指導要領の解説と展開』教育出版(2008)
- ・ 松川禮子・大城賢『現場の先生をサポートする小学校外国語活動実践マニュアル』旺文社(2008)
- ・ 文部科学省『小学校学習指導要領解説外国語活動編』(2008)
- ・ 直山木綿子『ゼロから創る小学校外国語活動』文溪堂 (2008)
- ・ 白井恭弘『外国語学習の科学-第二言語習得理論とは何か』岩波新書 (2008)
- ・ 直山木綿子『小学校新学習指導要領の授業外国語活動実践事例集Ⅰ』小学館 (2009)
- ・ 直山木綿子『小学校新学習指導要領の授業外国語活動実践事例集Ⅱ』小学館 (2009)
- ・ 文部科学省『英語ノート1』(2009)
- ・ 文部科学省『英語ノート2』(2009)
- ・ 文部科学省『英語ノート1 指導資料』(2009)
- ・ 文部科学省『英語ノート2 指導資料』(2009)
- ・ 岡秀夫・金森強『小学校英語教育の進め方 改訂版 ―「ことばの教育」として―』成美堂 (2009)
- ・ 菅正隆・大牟田市立明治小学校『外国語活動をもっと楽しく知的にする！ 英語ゲーム&教材アイデア60』明治図書(2010)

- ・直山木綿子『小学校外国語活動モデル事例集』教育開発研究所（2011）
- ・直山木綿子『英語ノート1を活用した英語活動の授業』小学館（2011）
- ・直山木綿子『英語ノート2を活用した英語活動の授業』小学館（2011）
- ・齊藤榮二『生徒の間違いを減らす英語指導法インテイクリーディングのすすめ』三省堂（2011）
- ・白井恭弘『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店（2012）